

近世の村と寺

— 紀伊国伊都郡境原村を事例として —

渡辺尚志

はじめに

- 一 一七世紀の小峯寺と堂座
 - 二 一八世紀前半の村と寺
- おわりに

論文要旨

本稿は、紀伊国伊都郡境原村と同村の小峯寺・東光寺を事例に、一七世紀半ばから一八世紀半ばにかけての近世村落と寺院の關係について考察したものである。その際、近世社会を諸社会集団の重層と複合として把握した社会集団論の視角を取り入れた。すなわち、村と寺の問題を、村（百姓）の視点からだけでなく、寺（住職）の側にも身を置きつつ、複眼的に考察してみた。

その結果、①幕藩領主の本末制度整備を主体的に利用して、本寺に接近することにより、村方（堂座）から自立しようとする小峯寺住職、②村方を権的に代表して住職と対立しつつ、次第に一般村民から離反され、地主身分獲得にも失敗して衰退していく堂座、③一七世紀の堂座に代表される受動的な存在から脱却し、一八世紀前半には発言力を強めていく一般村民、という各層の動向を明らかにした。